阿 波 の ま ち な み 研 究 会 報

まち研だより

2024 年 3 月号

vol.348

■太鼓楼見聞録(53)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2～3

■出羽島の集落と民家(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・4～6

■三好市井川町 大森若宮姫神社・・・・・・・・・・・・・7

■事務局通信 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

阿 波 の ま ち な み 研 究 会

〒770-0931 徳島市富田浜 2-10 (公社)徳島県建築士会

phone：088-653-7570 fax：088-624-1710

太鼓楼見聞録 (53)

三条市三条城跡と本成寺 2

谷中　俊裕（阿南高専）

前回は新潟県三条市の三条城の歴史と現状を中心に紹介したが、今回と次回は同市の本成寺を紹介し考察を加えたい。本成寺は、一部城郭造りで、ちょっとした大名の陣屋を上回る規模がある。三条城からの移築伝承のある黒門(東の山門)、太鼓楼の存在を暗示する太鼓門、梁間三間二重門の三門(南の山門)、上層も方形平面の多宝塔、袴腰に火灯窓を配する鐘楼と、建築にも見所が多い。今回は、紙面割の都合で、本成寺の全般的情報の紹介の後、前回で三条城を紹介した流れから、黒門をまず取り上げる。図版や文献は、前回からの通し番号で示している。

４. 本成寺（三条市本成寺西 1-1-20 法華宗陣門流総本山）

同じ日蓮を宗祖としていても法華宗とは日蓮宗と如何に異なるのか。多くの仏教用語辞典で示されるように、法華経は前半の迹門(しゃくもん)と後半の本門(ほんもん)に二分され、本門が迹門に優れると優劣を認める学派を勝劣派、法華経全体を一体のものとして扱う学派を一致派と呼ぶ。ごく大雑把に言うと、現在の公称としての日蓮宗は一致派、法華宗は勝劣派である。両宗以外にも日蓮系独立宗があり、日蓮宗内にも、法華宗内にもいくつか門流がある。それらの相違点については、本稿では割愛したい。

4-1. 本成寺の立地と略史

本成寺は、信濃川支流の五十嵐川の信濃川への合流点から 1km ほど南方に広大な伽藍を擁する。三国街道やその脇街道も近く、陸上・河川交通の要衝を占め、布教の便を見越した選地だったと言える。その反面頻繁に水害に見舞われたが、三条が榊原氏村上藩領の時代、寛文 12 年(1672)、寺域を囲繞する堤が築かれた。この堤には明治後期に桜が植樹され、花の名所となっていた。(堤については文献 10)

現在の伽藍配置は、図 6 の境内鳥瞰図の通りである。内郭の南辺と東辺の角近くに水堀を配する。(写真 3)内郭南門の水門と、東門の太鼓門から、両側に塔頭が並ぶ参道がそれぞれ南と東に伸びる。それらの南端と東端に三門(赤門)と黒門が建ち、境内内外の仕切りとなっている。

写真 3: 内郭の水堀と鐘楼

本成寺の歴史は、日蓮(陣門流でも宗祖)入滅後教団の後継者となった六老僧の一人である日朗(本成寺初祖)に師事した日印(本成寺開山)に始まる。永仁 5 年(1294)、越後寺泊出身の日印が越後布教の途中、現境内の東に近接する牛池(現「御池」、青蓮華院内)のほとりに草庵を結び、三条の土豪山吉氏(池氏の一族)を開基とし、青蓮華寺と号した。正和 3 年(1314)、より本格的な伽藍を寄進され、寺号を本成寺と改めた。日印の後、法灯は日陣(門祖)に引き継がれ、流派の名は日陣に由来する。(この段文献 10)

山吉氏だけでなく、上杉氏・長尾氏の庇護も受け、長尾実景(-1453)の代には寺領 300 石を知行している。武装集団としても隠然たる勢力を有し、上杉氏の五十騎衆の一つに数えられている。永正年間(1504-21)の武功から寺領を 1300 石に加増されている。上杉氏移封後の慶長 3 年(1600)、寺領は新発田溝口氏領となり、軍役を免ぜられる代りに改めて 300 石の寺領を給された。これは、慶安元年(1648)、幕府からの朱印地に改められた。(この段文献 10、1(401-3))

戦火やその他の火災で、本成寺は、文安年間(1444-8)、天文 20 年(1551)、宝暦 8 年(1758)、明治 26 年(1893)の 4 回、大部分の堂宇を失っている。図 6 の本堂、庫裏、客殿、書院など内郭西側、北側の堂宇はすべて明治の火災後の再建、新築で、内郭でもこれらの中核部から離れた多宝塔、鐘楼、水門や

図6:「本成寺境内鳥瞰図」(文献11裏面) ①水堀 ②三門 ③水門 ④黒門 ⑤太鼓門 ⑥本堂 ⑦客殿 ⑧庫裏 ⑨書院 ⑩多宝塔 ⑪鐘楼 ⑫千仏堂 ⑬善神堂 ⑭青蓮華院(青蓮華寺跡) ⑮御池(牛池)

外郭の六角千仏堂、番神堂や三門は、宝暦の火災後に建築され明治の火災を生き延びたものである。(この段ここまで文献 10、12(22)) 内郭の一部だけを囲む水堀は、防御施設としては不完全なので、その本質は、防(消)火設備なのかもしれない。

4-2. 黒門（三条市指定有形文化財）

東の山門に当たる黒門は、東からの参道の入口中央に建つ武骨な大型薬医門である。門扉は常に解放されているが、両脇は自動車でも通行可能である。(写真 4)

この門は、建築年代の記録はないが、前述の宝暦と明治の火災も免れた、本成寺の現存最古の建造物で、三条城からの移築伝承がある。文献 13 では移築元を「三条城」としているが、文献 14(84)とその引用と思われる文献 15(18)では「三条領主山吉定明の屋敷門」としている。「三条城」と「三条領主の屋敷」はほぼ同義だが、「山吉定明」というと本成寺開基の 1 人と伝えられ、(伝承が正しければ)鎌倉末期の遺構ということになる。さすがにそこまで古い遺構はあり得ないということで、教育委員会の解説板である文献 13 では屋敷の主の名には言及していないのであろう。

門の基本構造は、赤桟瓦葺の一間一戸平入切妻薬医門である。角切石礎石上の軸部では、10.80 間隔で並ぶ 1.45 尺×0.90 尺の木太い親柱が、後方 7.27 尺の 0.75 角の控柱と、妻側の腰貫、飛貫、平側の親柱足元の、中央が窪む蹴放(けはなち)で固められる。腰貫・飛貫間には、後補の筋交も入る。門扉は、上部が粗い縦格子窓となる框(かまち)戸である。

小屋組は、自然材の形状を残す冠木が女梁を介さずに親柱上に、同じく自然の曲を残す頭貫が控柱上に刺さり、その上に左右の妻梁が渡る。それらの中央に敷桁が渡され、さらにその中央に中備の蟇股、両端に笈形(おいがた)に挟まれた蓑束が立ち、すべて大斗と(絵様無し)実肘木を介して棟木を支える。

屋根は、大棟は箱棟で側面には一重の青海波をあしらう。螻羽(けらば：屋根の妻の際の部分)は、二列の風切瓦の外側を二段の掛瓦を配する蓑甲(みのこ(う)：妻と屋根勾配の境界を斜めに覆う部分)が覆う。鬼瓦、軒瓦、蓑甲掛瓦には、本成寺の「本」の字を刻む。破風板飾りは、中央の蕪懸魚のみ、軒裏は一軒疎垂木である。（以上の記述は、文献 13、14(84)、15(18)、16(50)の黒門の描写をまとめたもの）桟瓦自体は反りのない傾斜で葺かれ、反りは破風板と蓑甲の反りが描出する。平側の立面図を見ないと気付きにくいが、蓑甲部はクリフカット状に上部が張り出している。見上げたときの先細り感の防止、雨仕舞の効果を期待しているのかもしれない。また、軒先末端に斜め下外向きの瓦を短く配し、一見入母屋風に見せるのは心憎い。(写真 4)

文献 15(18)、16(50)では、彫刻の様式から江戸中期と推定されている。しかし、16(50)では、同時に三条城からの移築伝承も考慮すべきとしている。私見では、三条城から最も門が譲渡されそうな時期は、慶長 11 年(1616)の市橋長勝就封時以後の旧三条城廃城時、稲垣重綱転封後の寛永 19 年(1642) [他説もあり]の新三条城廃城時(いずれも前回の連載参照)である。移築元の門の建造年がそれらより多少なりとも遡るとすると、純粋に彫刻様式からの推定の江戸中期とは食い違う。しかし、寺院風の彫刻が門の創建後のものだと考えると一応つじつまは合う。黒門に残る過去の部材の痕跡としては、親柱外側側面の袖壁用枘穴や冠木や軒桁の小天井跡などがある(文献 15(19))が、これらは黒門の移築を裏付けるものではない。また、装飾の少なさと乗馬のまま通行できる立ちの高さから、城門起源が疑われずに語り継がれてきた側面もあると思われる。　(次回に続く)

左 写真 4: 黒門平側正面　右 写真 5: 同平側正面と左妻側

参考文献　文献番号は前回を継承、今回言及のないものは省略。

1. 三条市史編修委員会編 (1983)*『三条市史 上巻』*、新潟県三条市.

10. 法華宗新潟教区宗務所編刊 (1976)*『法華宗新潟教区寺院名鑑』*、「総本山本成寺由緒」ページ番号なし(序文の前).

11. 法華宗総本山本成寺編 (発行年不明) *『越後三条市 法華宗総本山本成寺案内』*、参拝者向パンフレット.

12. 平山育男、西澤哉子 (2011)「本成寺多宝塔建造物詳細調査報告」、*『郷土記録誌 ふるさと三条』*第 19 号、pp22-29、三条市刊.

13. 三条市教育委員会作成 (設置年不明、2012 以後) *『三条市指定有形文化財 建造物 本成寺黒門』*、現地の解説板.

14. 総本山本成寺開創七百年奉讃会教化宣伝部編同会刊 (1997) *『総本山本成寺後開山日印聖人伝』*.

15. 平山育男、西澤哉子 (2012)「「正覚寺山門」と「本成寺黒門」の建造物詳細調査報告」、*『郷土記録誌 ふるさと三条』*第 20 号、pp9-26、三条市刊.

16. 長岡造形大学編 (2017)*『三条市歴史的建造物調査報告書Ⅱ』*、三条市刊.

出羽島の集落と民家（１）

喜多　順三

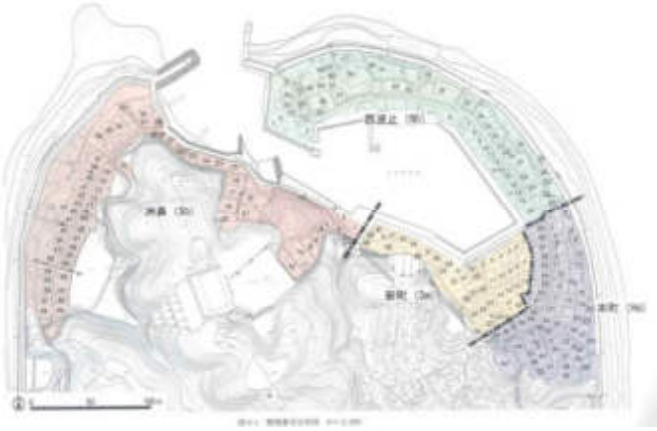
※「令和５年度中国四国ブロックまちづくり委員長会議 in 出羽島」の講習会資料を再編集したものです。

『海上の理想郷
　海部郡牟岐町に在り海上二十余町
　往昔は無人の孤島なりしも漁業に適するを以て移住するもの多く現今百二十余戸を算す、人情淳朴、生活平安にして風光絶佳、眞に海上の理想郷なり』
「東宮殿下徳島県行啓記念」に載せられた出羽島の写真解説（大正 11 年(1922)刊行）

出羽島　大正 11 年（1922）

◇地区の概要
　出羽島は牟岐町の南方約 3.7km に位置し、南北約 982m　東西約 625m　周囲海岸線の長さ 3.05km 島は台地状をなし、南部が高く北へ斜下する。黒潮の影響により徳島県内では最も暖かく、亜熱帯性気候に属しているため年間を通じて温暖な気候の島である。
　島の北部に東西から延びる砂嘴に囲まれた入り江があり、そこに出羽島漁港が設けられている。

台風、季節風や津波などの厳しい自然環境に備える湾入地形をなし、後背山に囲まれた天然の良港である。



◇土地利用
　漁港周辺に生活関連施設集中している。
・連絡船乗り場の周辺には漁村センター等の漁業関連施設が立地
・漁港の東側に恵比寿神社、郵便局、診療所、出羽神社があり、歴史的にも島の中心的な場所
・港周辺の平坦地は宅地で充填、耕作地は背後の山腹や台地を開墾した段々畑
・入り江の線に平行して比較的広い通りが続き、そこから派生してアワエと呼ばれる幅員の狭い通路が多数見られる
・近年、家屋が解体された空き地や耕作放棄地が目立つようになっている

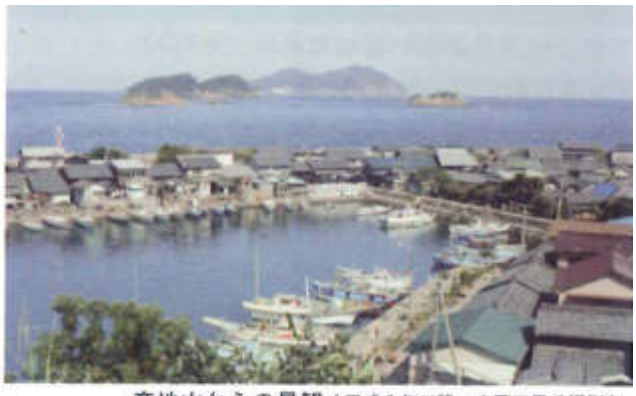
門口

門口

洲鼻

洲鼻

観栄寺の南東からの景観



彦地山からの景観（平成３年以降・小栗三男氏撮影）

小学校からみた池の谷・西波止の景観
（昭和 40 年頃・小栗三男氏撮影）

向江からみた西波止東部の景観

西防波堤（大波止）からみた西波止の景観

昭和初期の西波止からみた新町の景観
（昭和４年以前・撮影者不明・平野邦子氏所蔵・部分）

新町からみた池の谷の景観

隠居谷と門口を望む景観

島の東からみた段々畑の景観

東防潮堤の景観

海上から望む段々畑

堤防越しにみた集落と段々畑

三好市井川町　大森若宮姫神社

代表幹事　坂口敏司

井川町の山深いところに面白い神社があったと三好市教育委員会の宮田さんよりメールをいただきました。

取り急ぎ、送って頂いた写真と現在解っているところを紹介します。

この神社は、井川町井ノ谷大森岡に鎮座し、神社庁の登録外の神社です、阿波学会の井川町総合調査においても未調査となっています。

送ってくれた資料には、

祭神は、「大宮姫命」
旧社名は、「若宮大明神」
社地は、東西拾間、南北八間
本社　禿倉　梁行二尺二寸　桁行一尺六寸
拝殿　梁行二間　桁行三間
木鳥居　一ツ
狛犬　　二ツ
末社　若宮社ニテ山之神社　大山祇命鎮座

写真を見ると、木造一間社入母屋造り檜皮葺で正面に千鳥破風が付き、向拝は縋る破風で延ばし、軒先は軒唐破風としています。

箱棟に鬼板を付け、置き千木と鰹木を載せています。

組物は、三手先とし、天井は通肘木に詰斗で飾っています。頭貫は、井川町でよく見られる切放しとしています。

向拝の木鼻は、象鼻で、これまでに見かけないデザインです。

建立時期は、江戸末期から明治初期と思われます。建立当初の姿をよく留めており、近いうちに詳細調査を行いたいと思います。

【事務局通信】

令和６年１月例会の報告

◇令和6年月1月の例会は、建築士会関連の各種イベント日程と重なったため、中止となりました。

◇まち研だより発送作業
1 月 25 日（木）17：00～
坂口、鍬田、丸山、島田

令和６年２月例会の報告

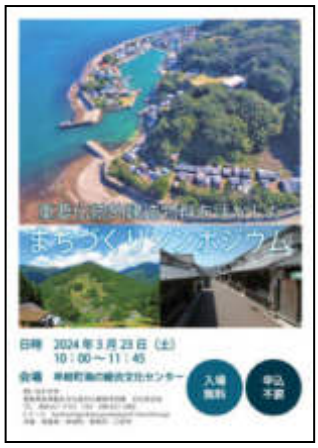
◇令和６年２月 16 日（金）の例会は中止とし、翌２月 17 日（土）に県外研修会（大阪・兵庫）を実施しました。

◇県外研修の実施状況
見学先：香里園・八木邸（藤井厚二設計）
旧岡田家住宅・酒蔵（重要文化財）
旧石橋家住宅（県指定文化財）
参加者：15 名（まち研会員：9 名、会員関係者３名、会員外（建築士会会員）：3 名）
※研修会の詳細は、後ほど「まち研だより」にて報告の予定です。

イベントのお知らせ

◇「重要伝統的建造物群を活かした
まちづくりシンポジウム」
会　場：牟岐町海の総合文化センター　ホール
日　時：令和6年3月23日(土)　10:00～11:45
日　程
(1)開　会　　10:00～10:05
(2)発　表　　10:05～10:30
「出羽での交流と『出羽語りかるた』の製作」
徳島大学総合科学部社会総合科学科
4年生　月岡　瑠乃
「出羽にかよって、、、
出羽島における合意形成の可能性」
徳島大学総合科学部社会総合科学科
4年生　吉岡　旭
(3)パネルディスカッション　10:30～11:45
「重要伝統的建造物群の今とこれから
―未来につなぐ保存･活用･まちづくり―」
パネリスト　出羽島部落会会長　田中　幸寿
牟岐町教育委員会　前原　健太
美馬市教育委員会　拜郷　哲也
三好市教育委員会　宮田　健一
徳島大学4年生　月岡　瑠乃
徳島大学4年生　吉岡　旭

共　催：徳島県/牟岐町/美馬市/三好市
問合せ:徳島県未来創生文化部文化資源活用課
TEL:088-621-3163　FAX:088-621-2886
☆入場無料、申し込み不要です。ご興味のある方はぜひご参加ください。



令和６年４月例会について

◇令和6年4月 19日(金)18:30～　例会
建築士会会議室
※まち研だよりの発送作業はありません

編集部より

☆なんだか近頃、出羽島がアツいです。

☆原稿を募集しています。送付は以下まで。
Mail: m-style@mb.pikara.ne.jp

《まち研だより》2024 年３月号 VOL.348 号
発行日　令和６年３月 15 日（金）
発　行　阿波のまちなみ研究会
〒770-0931 徳島市富田浜２丁目 10
(公社)徳島県建築士会
TEL.088-653-7570　FAX.088-624-1710
代表者　坂口敏司(坂口建築設計室)
事務局　真鍋憲資(studioKEN)088-635-4272
studioken@mc.pikara.ne.jp
編集者　島田めぐみ(M-STYLE 設計室)
谷中俊裕(阿南工業高等専門学校)